

ヤスパースの「哲学的論理学」について

——その特性と東洋思想とのかかわり——

宮崎 佐和子

ヤスパースの哲学において哲学的論理学は哲学的信仰と並んで、いわゆる後期の哲学の核心をなす概念であるが、論理学と信仰という相異にも拘らず、ヤスパース哲学理解のために常に強調されるのが両者の相即である。しかし、哲学的論理学は彼の哲学を非合理的とみなす諸々の批判に対応するための理論でもあり、従って、哲学的信仰との相即は安易に主張されてはならない。そこで、この小論では哲学的論理学に焦点を当て、その特性を明らかにしながら、何故この論理学が哲学的信仰と相即すると主張されうるのかを探ってみたい。なおその際に、ヤスパースと東洋思想、とくにインド哲学との関連を顧慮することが有効と考える。

一

まず、『哲学的論理学 第一巻 真理について』に依拠しつつ、

ヤスパースが己れの哲学的論理学をどのような論理学と主張しているかを把握しておく⁽¹⁾。

彼は、「ここで私が示そうと努めているものの本質的特徴が表題に指示されるべきであるなら、『論理学』の代わりに理性的自己意識の組織法 (Systematik des vernünftigen Selbstbewusstseins) と言われるであろう」(PL, s. 15) といっており、この表現にもこの論理学の特性が認められるが、彼自身は「哲学的論理学の性格」として、a 全てを包括する、b 区別する、c 不断に統一を求める、という三つをあげている。ヤスパースによれば、論理的な知は諸科学の知に基づくと同様に、日常的思惟や経験、行動、決断等の人間のあらゆる内実に基づいていると考えられており、そこで、彼のいう論理学は、これら全てを包括することによって「最も包越的な真理意識へと駆り立てていく」(PL, s. 4) とらわ

れる。ただし、「最も包越的な真理意識」とは、一切の真理意識を統合すると同時に、その各々の根源を透視し、それらの独自性と限界を自覚しているという意味で、それは区別する論理学なのである。従って、哲学的論理学は根源を区別しつつ真理意識を統一するといえるが、ヤスパースの考えではこの統一は不斷に求められねばならないのである。

ところで、哲学的論理学のこれらの性格は、ヤスパース哲学における真なる存在の考え方、並びに、それを認識する方法の特殊性にその根源をもっているといえる。

「真なる存在の意味の限界と根源を探究する」(Pl. S. 31)とを意図した『哲学的論理学 第一巻』の第一部で、彼は存在を《das Umgeleitende》(包越者)⁽²⁾と表現し、これを、「我々の方に現われてくる現象が開顕されるに伴ってそれ自身としては我々から退いていく存在」(Pl. S. 36)であり、「(常に狭隘にする)対象でもなければ、(常に局限していく)地平の中で形成された全体でもない存在」(ibid.)と説明した。つまり、この存在は現象でも対象でもなく、いかなる限定も許さない存在であり、その本性からして、包越者には対象的思维が及びえないことは明らかである。

そこで彼はこの存在のためには思维の操作が必要であるとし、それを「哲学的根本操作 (die philosophische Grundoperation)」と名づけた。その内容は、a 転回させ、限定された存在者から解放し、b 現存在の習慣にとつては不自然であり、c

思维そのものを飛び超え、d 通常の認識という意味では矛盾することが遂行可能であり、e 包越者へと歩み入るが、あるものを所有することはない思考であると述べられてはいるものの、これらは極めて特殊かつ難解である。

従って、この論理学は論理学史を通して特異な学として位置づけられざるをえないのであり、また、ヤスパース自身『哲学的論理学』の序文で、「今日の思维は根底からの論理学の改革を必要としている」(Pl. S. 26)といひ、自覚的に独自の論理学を構想していたことが知られるのである。

二

本来ならば、ここで彼の哲学的論理学としての独自性を詳しく検討すべきであるが、ここでは形式論理学と弁証法とを念頭に置いてその独自性を確認しておく。

一般に、論理整合的といわれ論理的に真とみなされるのは、一義的で不変な形式論理学の真理であり、この場合には、常に無矛盾であることが真とされる。これに対して、「真なるものは全体である」⁽⁴⁾というヘーゲルの弁証法では、真理は動的、可変的であり、必ずしも一義的ではなく、矛盾をも内包しうる。

ではヤスパースの哲学的論理学はいずれに属しうるかといえば、包越者の思想を展開させた彼の哲学の中に「存在と無の弁証法 (Dialektik von Sein/Nichts)」という表現が見出せることから

も明らかであるが、ヤスパース自身は弁証法を二様に考えており、正—反—合という形で相対立する命題を新たな命題に統合していく弁証法に対して、彼の弁証法は対立から統合へは至らず、「存在が完全に引き裂かれるかのようにみえる限界に導く」(D.G. s. 262)といつて、弁証法としての独自性を主張している。

この「存在と無の弁証法」という表現は、『哲学的論理学 第一巻』出版の一五年後の著作『啓示に面しての哲学的信仰』に見出せるが、この著作は彼が包摂者の思想を十分醸成させた後のいわば最後の主著ともいえるものであり、その一節「根源へ突き進む問い…何故一般に何ものかが存在し、何故無ではないのか」(Warum ist überhaupt etwas, warum ist nichts?) においてこの言葉が用いられている。⁽⁵⁾ここに記されている「存在と無の弁証法」は、彼が先に哲学的論理学において述べた思维方法の具体的展開ともみなしうるが、この弁証法の内容は次の三点に集約できるであろう。すなわち第一に、この思维方法は「存在」という表現をも真なる存在の一つの暗号とみなすこと、第二に、存在する一切のものから飛躍する思维であること、第三に、対象的思维を變動させること、の三点である。

まず、存在への問いとして「何故一般に何ものかが存在し、何故無ではないのか」と問う場合、この問いには「存在」や「無」という概念が固定的に導入され、問いの中で既にそれらが指示されてしまっている。そこで、これらの概念を一つの暗号と解釈し

ようというのがヤスパースの考え方なのである。そしてこのことは「存在」や「無」に限らず、「神」、「一者」、「実体」、あるいは「アトム」「ブラフマン」、「ニルヴァーナ」、「空」をも暗号とみなすことを意味している。また、ヤスパースは「思想は、第一存在、原存在、原根拠、根源において終結しようとする。しかしこのような行程では終結は得られない。そこで思想はこれらの系の始原としての根源ではなく、系全体の根源を問うことによってそこから飛躍する」(P.G. s. 416)という。すなわち、存在しているものの根源へ遡るというより、「始原」や「根源」等の言語化を超えたものへと飛躍する思维を彼は求めたのである。そこで、ヤスパースはさらに「思维の變動」つまり「他の次元への、空間のない時間のない対象のないものへの變動」(ibid.)を主張し、真なる存在を頭わにする思维は、空間、時間、対象を欠いた全く異なる次元への思维であることを記している。

このように、ヤスパースの「存在と無の弁証法」は、「存在」や「無」に関する一切の思维を、その限界をも超えるべく駆動させることに意義があり、そこではヘーゲルの絶対知に相当するようないかなる到達点も得られず、それ故にこそ彼はこの弁証法を「存在と無の真の弁証法」(die wahre Dialektik von Sein-Nichts) (P.G. s. 411)とも呼ぶのである。とはいえ、この弁証法の内容は必ずしも明確ではなく、ヤスパース自身による本格的論及は彼の著作の中に直接には見出せないのである。

そこで次に、哲学的論理学の具体的発現とみなしうる「存在と無の弁証法」の意味を説明するために、一つの手段として、ヤスパースがこの思想の展開と時期を同じくして積極的に受容していたインド哲学に関する彼の理解の仕方を求めることにするが、その最大の理由は、彼が論理的側面においてインド哲学に強い関心を抱き、とくにナーガールジュナの思想を弁証法として高く評価したことにある。⁽⁶⁾

彼は「そこに何かが見出せる限り、思惟可能なものはいずれも弁証法的に否定され、この操作はとりわけナーガールジュナによって展開されている」(G.P. § 33C)と述べて、ナーガールジュナの思想の中に、思惟可能な一切のものを否定していく弁証法的思惟を認め、とくにその思惟の操作に着目したのである。中でも次の三つの否定に関するナーガールジュナ解釈を検討することが「存在と無の弁証法」の意味解明のためには有効であろう。⁽⁷⁾つまり、第一に、存在と非存在の否定、第二に、思惟されたものの否定、第三に、思惟そのものの否定の三点である。

ヤスパースのナーガールジュナ論の核心は、ナーガールジュナ哲学の中心概念である「空性」の解釈にあるが、彼はそれを『中論』の「観存在・非存在品第十五」の解釈を中心に展開した。ナーガールジュナはこの箇所自体存在について論じ、それが無い

とする仮定も、あるとする仮定ともに覆されざるをえないことを示し、その論述を通して存在—非存在という捉え方の根拠のなさを明示している。ことにその第十偈では、

「存在する」というのは永遠(性)を捉えること、「存在しない」というのは断見である。

故に、賢者は存在と非存在とに拠るべきではない。

という表現でこのことを端的に記している。そして、ヤスパースはこの箇所を多く参照しながら、「この思想の核心は存在ならびに非存在の不可能なことの提示にある」(G.P. § 33C)と解釈したのである。

さらに、ヤスパースはナーガールジュナ論の中に「思惟の操作の意味」という項を設け、「ナーガールジュナは思惟しえないものを思惟し、言い表わしえないものを言い表わそうとしている。彼はそのことを知っているので、既に言い表わされたものを元へ戻して解消しようとする。従って彼は自ら止揚する思考過程を歩む」(G.P. § 33C)という。つまり、彼は本来は思惟したり言い表わすことのできないものを、ひと度思惟し言語化し、さらにそれらを次々と破壊していくナーガールジュナの思考法に注目したのであるが、これは、「哲学的根本操作」というヤスパースの用語に即して表現すれば、「思惟されたものの操作的否定」ともいえるであろう。

また、ヤスパースはナーガールジュナの理論の中に思惟そのも

のを否定する思考法も認め、「思惟そのものによる思惟の挫折においてのみ、思惟以上のもの、完全な認識に至る思惟の止揚がある」(G.R. § 93)と解釈した。すなわち、思惟の否定とは、思惟を拒否したり、思惟に代わるものを要請することではなく、思惟を駆使しながら思惟を超えることであると理解したのである。

ナーガールジュナの思考法に関するヤスパースのこのような解釈を、先に「存在と無の弁証法」の特徴としてあげた三点と対比させるとき、この解釈はその理解を一段と容易にするのである。

すなわち、第一の点、つまり、存在に関する概念をいずれも暗号とみなすことに關しては、ナーガールジュナが存在や非存在という區別を付け、そのいずれにも固執することなく真理へ赴く思惟を主張したとするヤスパースの理解にその意味が反映しているといえるであろう。また、第二に、存在する一切のものから飛躍する思惟とは、彼がナーガールジュナ論の中に見出した「思惟されたものの操作的否定」と対応させることができよう。さらに、第三の特徴としてあげた対象的思惟の変動とは、思惟可能なものを思惟しながらも思惟そのものの挫折によって完全な認識を得るという意味での思惟そのものの否定であり、思惟の止揚とも言い換えられている。

これらのことから、ヤスパースの「存在と無の弁証法」は次のように理解することが可能になる。つまり、この弁証法は、存在—非存在という區別を前提とせず、従って、「存在」や「無」と

いうような概念で存在そのものを問うことはなく、そのために、ひと度思惟されたものも次々と否定し、さらには思惟そのものをも止揚する思考法である。それはいわば否定を方法とする論理であり、そこで最終的に求められているのは思惟しえないものとしての真なる存在である。

ところで、以上の考察は「存在と無の弁証法」をヤスパースの哲学的論理学の具体的発現とみなし、彼のナーガールジュナ解釈を介してこの弁証法の意味を索ったのであるが、さらに、ヤスパースのナーガールジュナに関する總括的敘述と、哲学的論理学の思考法に関する彼自身の表現とを対比させるとき、「存在と無の弁証法」とナーガールジュナ解釈との緊密な連関に加えて、この弁証法が紛れもなく彼の哲学的論理学の思考法と合致することが明らかとなるのである。

まず、存在に関する一切の言語化を斥ける思想としてヤスパースがナーガールジュナの存在—非存在の區別の否定に注目したところと、哲学的論理学が「前範疇的なもの超範疇的なもの」(*Vorkategorialen und im Transkategorialen*) 基盤を置き、そのようなものを暗示している(Pl. s. 4)という表現で示した存在の性格との著しい類似が認められるが、さらに、ナーガールジュナ論の中では「本来の真理は、言い表わされたものそれ自体を否定することによってのみ開示されうる。それ故、思惟されたものとしては真理でないような真理から、もはや思惟されないもの

として現われる真理への道が通じている。そして、この真理は先行する真理が燃え尽きる過程における思惟として存立する」(GP. 963)といい、他方『哲学的論理学』では、「包越者の解明においては、存在の構図の一つ一つが試みられるが再び放棄され、思惟体系の一つ一つが許容されるが、その意味で限定された視点に応じた単なる体系的の方法として制限され、さらに、一つの地盤に踏み込まれはするが再びそれが捨てられる。こうして、結局は地盤も原理もなく、無地盤な空間での思惟の浮動があるだけである」(PL. s. 186)と述べている内容を対比させてみると、「存在と無の弁証法」において探求されている存在は、哲学的論理学において真なる存在を意味した包越者に他ならず、また、この存在と無の弁証法」こそ哲学的論理学において五つの特性とともに示された哲学的根本操作と内容を同じくする思考法であることが判明するのである。

四

以上の考察を通して、ヤスパースの哲学的論理学がその独自性の根源を、包越者という真なる存在の在り方とその認識方法としての哲学的根本操作のうちにもつこと、そして、この哲学的根本操作とは「存在と無の弁証法」に他ならず、その内容が否定を方法とした論理であり、そこには、最終的には思惟しえないものを頭わにする意図があることが明らかになった。そこで、結論とし

て、ヤスパースがこの思想を何故敢えて「哲学的論理学」と呼んだのかを確認し、さらに、いかなる仕方での論理学が哲学的信仰と相即しうるのかを明らかにしなければならない。

まず「存在と無の弁証法」に着目するとき、ここにヤスパース哲学における論理的思惟の方法が認められたのであるが、この思惟方法は否定性によって貫かれており、その点で合理的、整合的な論理性を備えているとは言い難い。ただし、ヤスパースにとっては、このような存在探求こそ「哲学的」と呼ぶに値する思惟なのであり、そこで彼はこの思考法を単に「論理学」とせず「哲学的論理学」と名づけたと解釈できる。

しかし、このような思惟は、反面、一種の信仰的要素を免れないともいえる。つまり、そこで探求されている存在が開示される仕方は信仰とも呼ぶるものであり、だからこそ彼は自らの哲学を「哲学的信仰」としても語ったのである。ただしこの信仰は、極限まで思惟によって貫かれ、また、存在の探求を意図している限りどこまでも「哲学的」でなければならぬ。そしてこのような意味において、ヤスパースの哲学は、哲学的論理学と哲学的信仰とが相即しながら存在を探索する哲学といえるのである。

さらに付け加えるならば、彼が存在を「包越者」と表現した理由もこのことから判明する。つまり、論理学においては「存在」と呼ばれる思惟の対象があり、他方、信仰の対象を示す概念は「超越者」といえるが、ヤスパースの哲学はこの両要素を併せも

のために、また『das Ungeriefende』(包越的なもの=包越者)を主たる概念とせざるをえなかったと考えられるからである。また逆に、この概念を鍵として、論理と信仰という異質な二つの要素がヤスパースの哲学においては相即しているともいえるのである。

以上、ヤスパースの哲学的論理学の意味の解明を試みたが、その際に手がかりとしたヤスパースのナーガールジュナ解釈の正当性を吟味すること、並びに、この哲学的論理学が論理学としていかなる位置を占めるのかを詳細に検討することは、私自身の今後の重要な課題として残っている。

- (1) 「哲学的論理学」という概念が著作の中で最初に論じられたのは「Vernunft und Existenz, 1935」におけるものである。この書は「Philosophische Logik, Bd. 1, 1947」に拠った。
- (2) 『das Ungeriefende』という概念は一九三一年の冬の講義で語られた(PA, s. 86)。「Vernunft und Existenz」に初めて著された。なお、『das Ungeriefende』はむしろ「包越的なもの」とした方が、存在に関する一切の概念化を拒否するヤスパースの真意に近いが、便宜上「包越者」と訳した。
- (3) 形式論理学と弁証法という大別の仕方に関しては Robert Heiss, *Wesen und Formen der Dialektik*, 1959, (加藤尚武訳『弁証法の本質と諸形態』未来社、一九八一年)に拠った。
- (4) G. W. F. *Phänomenologie des Geistes*, Hrsg. von J. Hoffmeister, *Der philosophischen Bibliothek*, Bd. 114, 6. Aufl., 1952, s. 21.

- (5) "Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, 1962"の第五部第二章第三節において、存在の捉え方に関するヤスパース自身の考え方を示す際にこの表現が用いられている。

- (6) ヤスパースが積極的に東洋思想を学ぶに至ったのは Heinrich Zimmer との親交を通じてであり、それは一九二六年以前に遡る。

- (7) このヤスパースが用いた範圍内の文献で考察し、『中論』は Max Walleser, *Die mittlere Lehre (Mādhyanika-sāstra) des Nāgārjuna*, Heidelberg, 1911, を使用した。

- (8) 包越者の開示の仕方に関しては本論文では詳論しなかった。

なお、ヤスパースの著作からの引用注は文中に収めたが、その際の略号は次のとおりである。

- PA: Philosophische Autobiographie; Erw. Neuauflage, München, 1977.
- PG: Der philosophische Glaube, 1948, 6. Aufl., Zürich, 1974.
- PGO: Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, 1962, 2. Aufl., München, 1963.
- PL: Philosophische Logik Bd. 1, 1947, 2. Aufl., München, 1958.
- GP: Die großen Philosophen, München, 1957.
- (みやざわ・ちわじ) 哲学、お茶の水女子大学専任講師